

# 宮沢賢治特有のオノマトペ

## —賢治独特の非慣習的用法—\*

田 守 育 啓

### 1. 序論

宮沢賢治は、彼の作品が今日でも小中学校だけでなく高校の国語の教科書に取り上げられる程、有名な優れた児童文学者である。賢治は、農業、化学、地質学、天文学、科学、音楽を中心とする芸術、宗教、エスペラント語などの外国語等々、様々な分野において造詣が深く、彼の作品の随所に造詣の深さが見て取れ、子供だけでなく大勢の成人にも読まれている。賢治の作品はどの年齢層に読まれるかによって、解釈も異なり、賢治文学は独特の世界を築いている。

賢治文学のもう一つの特徴は、賢治独特のオノマトペの世界である。オノマトペは臨場感溢れる具体的描写力に富むことばなので、文学には不可欠の言語要素であると思われるが、その評価は文学者によって異なる。三島由紀夫(1959)は、擬音詞は女性や子供の文章に多い言語の墮落した形であって、抽象性に欠け、表現を類型化し卑俗にするので、みだりに使うべきでないと戒めており、オノマトペの魅力や価値を一切認めていない。対照的に、宮沢賢治は、オノマトペの価値を認めているだけでなく、様々なオノマトペを作品に用いてその魅力を最大限に活かしている。実際、井上ひさし(1984)は、オノマトペの優れた使い手として賢治を賞賛している。

宮沢賢治が「優れたオノマトペの使い手」や「オノマトペの達人」と称される所以は、ほとんどどの作品にもオノマトペが溢れ、その種類が、私たちが想像できないくらい豊富であり、しかも私たちが日常的に使っている、いわゆる慣習的オノマトペだけでなく、賢治独特の非慣習的なオノマトペが随所に見られるからである(田守2002、田守 2004)。このように、賢治のオノマトペは独特であると言われるものの、具体的にどこがどうユニークなのかを明らかにされていないと思われる。田守(2009)は、賢治独特と考えられるオノマトペが全くの無から創造されたのではなく、慣習的オノマトペから、その構成音を一部変化させたり、音を挿入したり、音の位置を入れ換えたり、音を繰り返したりといったいくつかの音韻現象によって創作されたと仮定している。

本稿では、宮沢賢治のオノマトペがユニークであることを別の観点から考察すること

にする。すなわち、慣習的なオノマトペを私たちが普段日常的に使っている慣習的な使い方とは異なる、賢治独特の使い方をしている例に焦点を当てた分析を試みる(田守 2010参照)。

## 2. 本論

賢治の作品には、慣習的オノマトペから、いくつかの音韻現象によって創作されたと仮定できる賢治独自の非慣習的オノマトペに加え、慣習的オノマトペを私たちが日常的に使っている慣習的な使い方とは違う、賢治独特の使い方で使用している例が多数見られるが、それらはいくつかの種類に分類できる。以下では、これらを順次見ていくと同時に、賢治がどのような意図を持って独特の使い方をしたのか、可能な限り解説を試みる。

### 2.1 通常使われない動詞と一緒にになったオノマトペ

オノマトペはヴィヴィッドで具体的な描写力があるとよく言われるが、別の言い方をすれば、一緒に使われる動詞が限られているということである。すなわち、動詞との共起制限がきついということである。例えば、「にこにこ」というオノマトペを例にとると、通常、「笑う」や「微笑む」といった動詞としか一緒に用いられない。しかし、賢治は「にこにこ」を「笑う」や「微笑む」以外の動詞と一緒に用いている。通常使われない動詞と一緒にになったオノマトペの具体例をいくつか見てみよう。

- (1a) パー先生は片袖まくり、布巾に薬をいっばいひたし、かぶとの上からざぶざぶかけて、両手でそれをゆすぶると、兜はすぱりととれた。(北守将軍と三人兄弟の医者)
- (1b) たちまち鞍はすぱりとはなれ、はずみを食った将軍は、床にすんと落された。(北守将軍と三人兄弟の医者)

「すぱり」は「すぱりと切る」に見られるように、ものを一度に気持ちよく断ち切る様を表すのに用いられ、通常、「とれる」や「はなれる」という動詞と一緒に用いられることはなく、「切る」という動詞と共起する。上の例では、「すぱり」ではなく「すぱり」といったオノマトペが用いられるのが普通である。では、賢治はなぜ「すぱり」を「とれる」「はなれる」という動詞と一緒に使ったのだろうか。賢治の真意は計り知れないが、「すぱり」と「すぱり」は、以上のように、通常一緒に用いられる動詞は異なるものの、動作が

一度にスムーズに行われるという点でよく似た意味を表すので、賢治にとっては「すぼり」と「すぼり」がその使い方においても似ていても不自然ではないと感じていたのかもしれない。いずれにしても、上の二つの例では、それぞれ兎が一気にとれたり、鞍が一気にはなれたりしたことが連想される。

通常使われない動詞と一緒にしたオノマトペの別の例を挙げよう。

- (2) ではお茶がひっくり返って、アルコールが青くぼかぼか燃えていました。(グスコ  
ーブドリの伝記)

「ぼかぼか」は「ぼかぼか暖かい」や体が「ぼかぼかする」等のように、穏やかに暖かい様を表し、上の例のように、「ぼかぼか燃える」などとは言わない。動詞との共起制限に違反する「ぼかぼか燃える」という非慣習的な表現は、激しく燃えるのではなく、暖かそうに穏やかに燃える様を連想させる。「ぼかぼか」を使う賢治のセンスの良さが解るだろう。

次の例も、動詞との共起制限に違反する賢治独特の使い方である。

- (3) 烏の大尉は列からはなれて、ぴかぴかする雪の上を、足をすくすく延ばしてまっ  
すぐに走って大監督の前に行きました。(烏の北斗七星)

「すくすく」は何も遮るものなく元気に育つ様や樹木が高くまっすぐ延びている様を表す。上の例に見られる「足をすくすく延ばす」という表現は明らかに不自然で賢治独特の表現であるが、どこに違和感があるのか考えてみよう。「すくすく」は「木の枝がすくすく延びる」や「子どもがすくすく育つ」に見られるように、通常、「延びる」や「育つ」のような自動詞としか一緒に用いることができない。しかし、上の例文ではこの制限を破って「延ばす」という他動詞と一緒に使っている。ここに不自然さを感じるのである。このように、上の例文に見られる「足をすくすく延ばす」という表現は不自然ではあるが、通常の使い方と違う点は自動詞ではなく基本的に同じ意味を表す他動詞と共に使っている点だけなので、意味的に大きく逸脱した表現にはなっていない。いずれにしてもこの非慣習的な表現から、烏の大尉が何の躊躇いもなく足をスムーズに元気よく延ばす光景が想像できるだろう。

## 2.2 通常一緒に用いられている動詞と正反対の意味の動詞と一緒に使われるオノマトペ

賢治の作品の中には、慣習的オノマトペが、通常一緒に用いられる動詞と正反対の意味を表す動詞と一緒に用いられる例が見られる。

- (4) …もちろん王のお宮へは使が急いで走って行き、城門の扉はぴしゃんと開いた。(北守将軍と三人兄弟の医者)

「ぴしゃん」は「ぴしゃっ」ほど一般的なオノマトペではないが、ドアを強く閉める様子を描写し、「ぴしゃんとドアが閉まった」のように、「閉まる」という動詞と一緒に用いられる。ところが、上の例では、「ぴしゃん」は「閉まる」とではなく、正反対の意味を表す「開く」という動詞と一緒に使われている。すなわち、「ぴしゃん」が動詞との共起制限を破って賢治独自の、逸脱した形で用いられている。賢治は、上の例で「ぴしゃん」を用いることによって、城門の扉が勢いよく一気に開いたことを表そうとしたと考えられる。

次の例においても、慣習的オノマトペが通常一緒に用いられている動詞と正反対の意味の動詞と一緒に使われている。

- (5) 助手がすぐエーテルの瓶を持って来る。 / サラバアユウ先生は / 手ばやくそれを受けとって / 将軍の足にがぶがぶそそぐ。(三人兄弟の医者と北守将軍 [韻文形])<sup>(1)</sup>

「がぶがぶ」は酒や水などを勢いよくむさぼるように飲む様子を表し、「飲む」という動詞と一緒に用いられ、「がぶがぶ注ぐ」のように使われず、「注ぐ」と一緒に用いられるオノマトペは「がぶがぶ」といわば反対の意味を表す「どくどく」である。「どくどく」と「がぶがぶ」は、それぞれ一緒に用いられる動詞が「注ぐ」と「呑む」といった具合に異なるが、関わっている液体の量はいずれも多いことが示唆され、上の例では、エーテルが多量に勢いよく将軍の足に注がれている光景が想像できる。次の例に見られる「どくどく」の使い方も賢治独特の非慣習的用法である。

- (6a) 「ああありがとうございます。助かります。」と云いながらかたつむりはふきのつゆをどくどくのみました。(蜘蛛となめくじと狸)
- (6b) 蛙はどくどくどくどく水を呑んでからとほけたような顔をしてしばらくなめくじを見てから云いました。(寓話 洞熊学校を卒業した三人)

「どくどく」は、「すると森までががあつと叫んで熊はどたと倒れ赤黒い血をどくどく

吐き鼻をくくん鳴らして死んでしまうのだった。(なめとこ山の熊)」に見られるように、通常、「吐く」や「注ぐ」という動詞と一緒に用いられ、液体が続けて多量に流れ出たり溢れたりする音やその様を表す。上の例では「どくどく」が「呑む」という動詞と一緒に用いられ、水などの液体を多量に呑む音ないし呑み方を描写するのに用いられている。通常、このような音ないし呑み方を表現するオノマトペは「どくどく」とはいわば反対の意味を表す「ごくごく」ないし「がぶがぶ」である。上の例に見られる「どくどく」の非慣習的な用法から、「どくどく」本来の意味に基づいて多量の液体を呑む様子が想像できる。(5)の「がぶがぶそそぐ」と(6a)の「どくどくのみました」の例から、賢治は「どくどく」と「がぶがぶ」を特に区別しないで用いたようである。

なお、山形県寒河江市の方言では、「水をごくごくと飲んでいたのよ」という意味で「水どくどくど飲んでだっけ」という表現を使うという指摘があり、上の例に見られる「どくどく呑む」という表現も東北方言の可能性がある(川越 2008参照)。

### 2.3 通常使われない名詞(主体)と一緒にになったオノマトペ

賢治の作品の中には、慣習的オノマトペが、通常使われない名詞(主体)と一緒に使われる例が見られる。

- (7) 赤毛はじゃらんと下に垂がりましたけれども、実は黄色の幽霊はもうずうっと向うのばけもの世界のかげろうの立つ畑の中にでもはいつたらしく、影もかたちもありませんでした。(ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記)

「じゃらん」は金属などが強く触れ合って一瞬立てる重く騒がしい音を描写し、典型的には神社やお寺の鈴の音を描写するのに用いられる。したがって、(7)のような「髪の毛」が主体として用いられることはない。上の例では、通常、「だらん」が用いられるだろう。なぜ賢治が毛の垂れ下がる様子を「じゃらん」という擬音語で描写したのかよくわからないが、この例文の数行前に「縮れた赤毛が頭から肩にふさふさ垂れ」という行があり、幽霊の縮れた赤毛があたかも金属でできているかのように捉えて、それが垂れ下がる時「じゃらん」という音がすると想像したのではと考えられないだろうか。

次の例においても、「さらさら」の使い方が賢治独特で、主体との共起制限を無視した用法である。

- (8) 風がさらさら吹き木の葉は光りました。(四又の百合)

「サラサラ」は「間もなく水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青い焰をあげ、やまなしは横になって木の枝にひっかかってとまり、その上には月光の虹がもかもか集まりました。(やまなし)」に見られるように、通常、小川の水が軽い音を立てて流れる様子を描写するのに用いられ、風が穏やかに吹く様子を描写するのには用いられない。したがって、「サラサラ」は主体に「風」ではなく、「川」を要求する。通常、風が穏やかに吹く様子は「そよそよ」で描写される。賢治は小川の水が軽い音を立てて流れる様子と風が穏やかに吹く様子を共通した現象と捉えて、風が穏やかに吹く様子を描写するのにも「サラサラ」を使ったと思われる。「サラサラ」流れる水の音は心地よく、「サラサラ」吹く風も爽やかな心地よい風を連想させる。

次の例においても、慣習的オノマトペの「もくもく」と主体との整合性がとれていない。

- (9) 見える、見える。あそこが噴火口だ。そら火をふいた。ふいたぞ。面白いな。まるで花火だ。おや、おや、おや、火がもくもく湧いている。(貝の火)

「もくもく」は煙や雲などが重なり合うように盛んに湧き起こる様を表し、通常、「火がもくもく湧く」とは言わない。つまり、「もくもく」と共起する主体は「煙」や「雲」であって、「火」ではない。私たちはこのような表現を使わないが、どのような状況か想像できるだろうか。賢治は火が重なり合うように湧き起こる様だけでなく、火の勢いが凄まじく「もくもく」沸き上がっている様も同時に読者に連想してもらいたくて、通常「もくもく」の主語が「煙」であるにも拘わらず、通常使われない「火」を主語として、「火がもくもく湧いている」という表現を使ったのだろう。

## 2.4 通常使われない名詞(対象)と一緒にしたオノマトペ

賢治の作品の中には、慣習的オノマトペが、通常使われない名詞(対象)と一緒に用いられている例が見られる。

- (10a) 二疋の雪狼が、べろべろまっ赤な舌を吐きながら、象の頭のかたちをした、雪丘の右の方をあるいていました。(水仙月の四月)
- (10b) その空からは青びかりが波になってわくわくと降り、雪狼どもは、ずうっと遠くで焰のように赤い舌をべろべろ吐いています。(水仙月の四月)

「べろべろ」には主として二つの意味があり、一つは下品に舌で強く舐める様を表し、もう一つは激しく炎が出たり、火が燃え広がったりする様を表す。上の例ではいずれも二



番目の意味を利用した表現であるが、通常、「べろべろ」と共起する対象は「舌」ではなく、「炎」や「火」である。上の例は、赤い舌を吐く様をあたかも炎を吐いているがごとくに喩えた表現で、飢えた狼が舌なめずりしている姿が想像できる。

次の「眼をプルプルさせる」という表現も賢治独特の表現で、通常、「プルプルさせる」という動詞の目的語(対象)に「眼」を当てはめることはできない。

(11) 狐が頭から雷さんをひっかぶったようにびっくりして眼をプルプルさせて少しずつあと戻りして引っ込みました。(けだもの運動会)

「プルプル」はこまかく震える様、弾力があって、小刻みに揺れ動く様を表すのに用いられる。上の例のように、「眼をプルプルさせる」という表現は、眼を上下左右に小刻みに揺れ動かすことはそもそも不可能で不自然に感じる。通常ならば、「眼をくるくるさせる」という表現を用いるだろう。なぜ賢治が物理的に不可能に近い「眼をプルプルさせる」という表現を使ったのか考えてみると、狐の驚きが尋常でないことを強調したかったのではないだろうか。この賢治独特の表現から、不可能であるが、眼があたかもプリンのような弾力のあるもののように小刻みに揺れ動いている情景が読み取れる。

次の「藤蔓をふっと吐く」も賢治独特の表現で、通常、「ふっと吐く」と共起する目的語(対象)は「息」や「煙」である。

(12a) タネリはおもわず、やっとなんかになりかけた藤蔓を、そこらへふっと吐いてしまって、その西風のゴスケといっしょに、大きな声で云いました。(タネリはたしかにいちにち囁んでいたようだった)

(12b) 藤蔓を一つまみ囁んでも、まだなおりませんでした。そこでこんどはふっと吐き出してみましたら、ようやく叫べるようになりました。(タネリはたしかにいちにち囁んでいたようだった)

「ふっ」は「百姓どもはぎくつとし、オツベルもすこしぎよつとして、大きな琥珀のパイプから、ふっとけむりをはきだした。(オツベルと象)」に見られるように、通常、口をすぼめて息や煙を吐く音ないしその様を表し、上の例に見られるように、「やっとなんかになりかけた藤蔓」のような固体には用いられない。したがって、上の例に見られる「ふっ」の使い方は気体だけでなく固体にまでその適用範囲を拡大した賢治独特の用法であると考えられる。小さい葡萄の種のような固体を口から吐き出す音ないしその様を描写するのに、通常、「ぶっ」を使うが、賢治は上の二つの例文で「ぶっ」ではなく「ふっ」を用

いたのはなぜだか考えてみよう。

実際賢治は同じ作品の中で「タネリは、柔らかに噛んだ藤蔓を、いきなりぷっと吐いてしまって、こんどは力いっぱい叫びました。」に見られるように、「ぷっ」を使っている。「ぷっ」が使われているこの例文と「ふっ」が使われている上の二つの例文を比べてみると、この例で口から吐き出したのは「柔らかに噛んだ藤蔓」であるのに対して上の二例では、「やっ」と柔らかになりかけた藤蔓や「一つまみ噛んだ藤蔓」である。すなわち、「ふっ」と「ぷっ」のいずれを用いるかは、藤蔓が十分に噛んで柔らかくなっているかどうかということが関係しているようである。十分に噛んで柔らかくなっている藤蔓の場合、形が整って小さくなっているので、口を閉じて息を止めて一気に解放すると簡単に吐き出せる。賢治はこの動作を描写するのに「ぷっ」を使ったと考えられる。他方十分に噛んで柔らかくなっていない藤蔓の場合、口を閉じて息を止めて一気に解放して吐き出す程小さく形が整っていないので、口を半開きにして吐き出す。この動作を「ふっ」で描写したと考えられるのではないだろうか。このような「ぷっ」と「ふっ」の使い分けから、賢治のオノマトペに対するこだわりが感じられる。ちなみに、両唇閉鎖音で始まる「ぷ」は、唇を閉じて息を止め一気に空気を解放させて発音するのに対し、両唇摩擦音で始まる「ふ」は、唇を閉じないで上唇と下唇の間に空気を通して発音する。

## 2.5 通常使われない名詞および動詞と一緒にになったオノマトペ

賢治の作品の中には、慣習的オノマトペが通常使われない名詞および動詞と一緒に用いられている例がある。

- (13) ある朝、お日様がカツカツカツと厳かにお身体をゆすぶって、東から昇っておいでになった時、チュンセ童子は銀笛を下に置いてポウセ童子に申しました。(双子の星)

「カツカツカツ」は慣習的オノマトペ「カツカツ」の語基を2回反復させた形態であるが、「カツカツ」はかわいたものがぶつかり続けるかわいた音を表し、「カツカツ靴を鳴らす」のように、典型的に靴音を描写するのに用いられる。上の例では、「カツカツカツ」という形で用いられているが、これは強調するためだと考えられる。そして擬音語ではなく、お日様があたかも自分が一番えらいかのように威厳を持って体を揺すぶる動作を描写した擬態語として用いられているようである。

次の慣習的オノマトペ「ポロポロ」の使い方も賢治独特である。



- (14) 今度は向うの三番書記の三毛猫が、朝仕事を始める前に、筆がポロポロころがってとうとう床に落ちました。(寓話 猫の事務所)

「ポロポロ」は小さい粒状のものが次々に零れる様を表し、「零れる」という動詞と一緒に用いられるのが普通である。この例では、「ポロポロ」は筆が転がる様を描写しているが、「ポロポロ」本来の意味である「零れる」という意味が欠如しているように思われ、単に「ころころ」と同義で用いられているように思われる。

次の「カラカラ」と「ギーギー」の使い方も賢治独特で、想像力に富んだ表現である。

- (15a) 「大鳥さん。それはいけないでしょう。王様をご存じですよ。」という間もなくもう赤い眼の蠍星が向うから二つの大きな鋏をゆらゆら動かし長い尾をカラカラ引いてやって来るのです。(双子の星)
- (15b) 蠍は尾をギーギーと石ころの上に引きずっていやな息をはあはあ吐いてよろりよろりとあるくのです。(双子の星)

上の二つの例文は同じ作品の中から採取したものであるが、賢治は蠍が尾を引きずる音ないし動作を「カラカラ」と「ギーギー」という異なったオノマトペで描写している。「カラカラ」は金属製や木製のものなど、かたいものが触れ合って立てる明るく響く音を表す。一方「ギーギー」はものが盛んに軋んで出る大きく鈍い音を表す。このように両者は対照的な音を描写する。

では、なぜ賢治は同じ動作を対照的なオノマトペで描写しているのだろうか。「カラカラ」に関しては、蠍の尾はかたくてそれがかたい地面と接触したときに「カラカラ」という乾いた明るい音がすると賢治は考えたのだろう。他方「ギーギー」に関しては、蠍の尾はかたいが節に分かれ曲げられる。蠍が石ころの上に尾を引きずると尾の節が曲がり、そのとき「ギーギー」という軋む音がすると賢治は想像したのだろう。「カラカラ」と「ギーギー」を使い分けている理由は、蠍の歩き方の違いによるものであろう。足取りが軽く歩いている場合には、軽快な「カラカラ」を用い、息も絶え絶えに足取りが重く歩いている場合には、尾を引きずって歩かざるを得ないため「ギーギー」を用いているのである。両者の使い分けは、賢治の繊細な語感の表れであろう。

## 2.6 比喩的に使ったオノマトペ

賢治の作品には、慣習的オノマトペを慣習的な使い方ではなく、比喩的に使った例が見られる。

- (16) 小十郎はまっ青なつるつるした空を見あげてそれから孫たちの方を向いて「行って来るぢゃい。」と云った。(なめとこ山の熊)

「つるつるした空」という表現はどこかヘンで、私たちはおそらくこのような言い方はしないだろう。なぜおかしいのか考えてみよう。「つるつる」は「つるつるした鏡面仕上げの家具」や「つるつるした肌」のように、表面が平らで、なめらかな様や、ものの状態がなめらかな様を表すが、このオノマトペは空に用いられることはない。

では、なぜ空に使うことができないのか考えてみよう。「つるつる」は表面が平らで、なめらかな様を表すと述べたが、このことは、実際に触ってみてはじめて確認できるのである。しかし、私たちは普段実際に触れなくても「つるつるした肌」といった表現を使っている。このようなことが可能なのは、過去の経験に基づいて、実際に触ってみた触感(触覚)と見た目の感覚(視覚)の関係について確立した判断基準を持っていて、その基準に従って、視覚からだけでつるつるしているかどうか判断できるからである。

一方、「つるつるした空」がどこことなく不自然に感じるのは、空に触れることは物理的に不可能で、「つるつるした肌」のように過去の経験に基づいた触覚と視覚の関係が確立されていないからである。賢治が上の例のように、「つるつるした空」という物理的に不可能なことを表す比喩的表現をあえて用いたのは、空が一点の雲もなく真っ青に晴れ渡っている状態を描写したかったのだろう。このように、基本的に触覚に関連する「つるつる」というオノマトペを視覚的(比喩的)に使うという賢治特有の生得的な想像力の豊かさも、賢治にのみ神から与えられた天賦の才と言えるだろう。

次の例に見られる「ぶんぶん」の使い方も比喩的であると考えられる。

- (17) …雪がぶんぶんと降る / 雁のみちができて / そこがあかるいだけだ、…(三人兄弟の医者と北守将軍 [韻文形])

「ぶんぶん」はひどく腹を立てて不機嫌な様を表すのに用いられるが、賢治は「ぶんぶん」を雪の降る様を描写するのに用いており、通常、「雪がぶんぶんと降る」という表現は意味的に逸脱していると判断される。しかしながら、「ぶんぶん」の意味から推測すると、雪があたかもひどく腹を立て怒っているかのごとく激しく降る様を描写するために、「ぶんぶん」を比喩的に用いたと考えられるだろう。

次の「しっぽをばしゃばしゃ振る」という表現も比喩的であると解釈できるだろう。

- (18) 向うの少し小高いところにてかてか光る茶いろの馬が七疋ばかり集まってしっぽ

をゆるやかにばしゃばしゃふっているのです。(風の又三郎)

「ばしゃばしゃ」は水面を何度も叩いたり、水がものに打ち当って飛び散ったりする水飛沫の音ないしその様を表し、それ以外の音や様を表さない。それにも拘らず、上の例では、馬が尻尾を振る動作の様態を描写するのに「ばしゃばしゃ」が用いられている。一見「ばしゃばしゃ」というオノマトペは馬が尻尾を振る動作と無関係に見えるが、馬が尻尾を振ったときの尻尾の動きが、何か水面に打ち当たったり、水がものに打ち当たったりしたときに飛び散る水飛沫によく似ているのではなからうか。賢治はおそらくこのような類推をして「ばしゃばしゃ」を比喩的に用いたのだと考えられる。

もちろん別の解釈も考えられる。上の例文では、通常、「ばさばさ」という慣習的オノマトペが使われると考えられるので、「ばしゃばしゃ」が「ばさばさ」から「さ」を「しゃ」に変える法則によって派生した可能性も考えられるだろう。

## 2.7 動詞として使われるオノマトペ

賢治の作品の中には、慣習的に動詞として用いられないオノマトペを動詞として使っている例が見られる。

- (19) 見ると東のとっぷりとした青い山脈の上に、大きなやさしい桃いろの月がのぼったのでした。(かしわばやしの夜)

「とっぷり」は日が完全に落ちて、夜の静けさがあたりをつつむ様を表すが、典型的な使い方は「日がとっぷり暮れる」などで、上の例の「とっぷりとした青い山脈」のような動詞的用法はない。したがって、この「とっぷりとした名詞」という動詞的用法は非慣習的で賢治独特のものであるが、「とっぷり暮れた」と同義であると解釈される。

次の「眼がぐるぐるする」や「目がぐるぐるっとする」も賢治独特の動詞用法と考えられる。

- (20a) 眼がぐるぐるして、風がふうふう鳴ったんだ。(黄いろのトマト)

- (20b) すると目がぐるぐるっとして、ご機嫌のいいおキレさままでがまるで黒い土の球のように見えそれからシュウとはしごのてっぺんから下へ落ちました。(ペンネンネンネン・ネネムの伝記)

「ぐるぐる」と異形態の「ぐるぐるっ」は共に何度も続けて回る様を表し、典型的に「回る」

という動詞と一緒に使われる。上の例のように、「ぐるぐるする」や「ぐるぐるっとする」といった動詞としての用法はないので、上の例では、「眼がぐるぐる回る」や「目がぐるぐるっと回る」という表現を用いるのが普通である。

では、次の「ぐるぐるする」はどのように分析すればよいのだろうか。

(21a) 「多分ひばりでしょう。ああ頭がぐるぐるする。お母さん。まわりが変に見えるよ。」(貝の火)

(21b) あんまりサイクルホールの話をしたから何だか頭がぐるぐるしちゃった。(風野又三郎)

上の例では、いずれも「頭がぐるぐるする」という表現が用いられているが、先の例に見られる「眼がぐるぐるする」や「目がぐるぐるっとする」と同様に分析できないだろう。なぜなら、「眼がぐるぐる回る」「目がぐるぐるっと回る」という表現は自然であるが、「頭がぐるぐる回る」という表現は不自然であるからである。また、「頭がぐらぐらする」と言えるが、「眼がぐらぐらする」とは言えない。上の例文では、「頭がぐるぐるする」は「頭がぐらぐらする」と同義と考えられる。このことから、「頭がぐるぐるする」は「頭がぐらぐらする」から「ら」を「る」、厳密には母音「あ」を「う」に変えて創作されたのではないだろうか。

## 2.8 様態副詞のオノマトペを結果副詞的に使ったオノマトペ

賢治の作品の中には、通常様態副詞として用いられる慣習的オノマトペが結果副詞的に使われている例が少なからず見られる。<sup>(2)</sup>

(22) 降らせろ、降らせろ、きらきらの燦岩で海をうずめろ。(楢ノ木大学士の野宿)

「きらきら」は通常、「様態副詞」として用いられるか、「動詞」として用いられる。例えば、「さて、かすかなかすかな日照り雨が降りましたので、草はきらきら光り、向うの山は暗くなりました。(めくらぶどうと虹)」では、どのような光り方をしているかを描写する「様態副詞」として用いられている。これに対し、「さて瓶がずらりと板の間にならんで、まるでキラキラします。(葡萄水)」では、「きらきらする」という動詞として用いられている。

しかし、上の例に見られる「きらきらの～」という使い方は、結果副詞の用法であって様態副詞の用法ではない。例えば、典型的な結果副詞である「くたくた」を例にとると、「くたくたに疲れる」「疲れてくたくただ」「疲れてくたくたの子供」のように、「くたくた」

は「に」を伴って結果副詞として機能したり、「だ」を伴って述語になったり、「の」を伴って名詞を修飾したりすることができる。一方、「きらきら」は「\*きらきらに輝く」「\*輝いてきらきらだ」「\*輝いてきらきらの星」のように、「に」を伴うこともできないし、「だ」を伴って述語になることもできないし、「の」を伴って名詞を修飾することもできない。<sup>③</sup>このような一般的な使い方に反し、賢治は上の例に見られるように、「きらきらの～」という表現を用いている。上の例文では、いずれも「きらきらの～」は「きらきら光る～」や「きらきらした～」と解釈できるが、私たちがこのような表現を使ったならば、おそらく逸脱した不適格な表現と見なされるだろう。このような通常逸脱していると考えられる表現をあえて使っているところが賢治独特の特徴と言えるだろう。

「きらきら」と同様、「ぎらぎら」も通常、様態副詞ないし「ぎらぎらする」という動詞として用いられるが、賢治は結果副詞的に用いている。

- (23a) 猫のような耳をもち、ぼやぼやした灰いろの髪をした雪婆んごは、西の山脈の、ちぢれたぎらぎらの雲を越えて、遠くへでかけていたのです。(水仙月の四日)
- (23b) そのとき西のぎらぎらのちぢれた雲のあいだから、夕陽は赤くななめに苔の野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のようにゆれて光りました。(鹿踊りのはじまり)
- (23c) ぎらぎらのお日さまが東の山をのぼりました。(シグナルとシグナレス)

「ぎらぎら」は様態副詞で、通常、「ぎらぎら輝く」や「ぎらぎらする」のように、様態副詞ないし動詞として用いられ、「\*ぎらぎらに輝く」「\*輝いてぎらぎらだ」「\*ぎらぎらの雲」のような使い方はしない。しかし、上の例では、「ぎらぎらの～」という使い方がされており、これも賢治独特の用法である。なお、お日さまが「ぎらぎら」しているのは理解できるが、「ぎらぎら」を雲に用いているのは、雲が強い西日を受けてあたかも雲自体がぎらぎら光っているかのように感じて表現したのではないだろうか。

「きらきら」や「ぎらぎら」だけでなく、「ごうごう」というオノマトペも「ごうごうの～」という形式で賢治独特の使い方をしてしている。

- (24) いきなり本線シグナル附の電信ばしらが、むしゃくしゃまぎれにごうごうの音の中を途方もない声でどなったもんですから、シグナルは勿論シグナレスもまっ青になってぴたっとこちへまげていたからだをまっすぐに直しました。(シグナルとシグナレス)

「ごうごう」は「ごうごう鳴る」や「ごうごう躰をかく」のように、様態副詞として

しか用いられず、結果副詞の特徴である「\*ごうごうの音」という表現はない。上の例では、「ごうごう鳴る音」という意味で、通常逸脱した表現であると理解される賢治独特の用法が用いられている。

## 2.9 動詞が省略されたオノマトペ

賢治の作品の中には、本来慣習的オノマトペと一緒に使われている動詞が省略されたと考えられる例が見られる。

- (25) 狐の生徒はみんな感動して両手をあげたりワーツと立ちあがりました。そしてキラキラ涙をこぼしたのです。(雪渡り)

「キラキラ」は光り輝く様を表し、「光る」「輝く」といった種類の動詞としか一緒に使われない。上の例では、「キラキラ」は「キラキラ涙をこぼす」という使われ方をしているが、「こぼす」という動詞を修飾して涙のこぼし方を描写しているという解釈はできないだろう。ここでは「キラキラ光る涙をこぼす」と解釈するのが自然だと思われ、「キラキラ涙をこぼす」が「光る」という動詞が省略された結果の表現であると考えられるだろう。次の文も動詞が省略された例と考えられるだろう。

- (26) 王は早速許されたので、その場でバーユー將軍は、鎧もぬげば兜もぬいで、かさかさ薄い麻を着た。(北守將軍と三人兄弟の医者)

「かさかさ」は乾いたものが擦れ合って発する軽い音を表すが、上の例のように、「かさかさ薄い麻を着た」といった表現は慣習的ではない。この文の意味を考えると、薄い麻を着るときにかさかさという音が鳴ったと理解できる。そうだとすれば、「かさかさ薄い麻を着た」という表現は「かさかさ {言わせて・音を立てて} 薄い麻を着た」から動詞表現が省略されて創られたと考えられるだろう。

次の文はどのように解釈すればよいのだろうか。

- (27) すると家の中からペタペタペタペタ沢山の沢山のばけものどもが出て参りました。(ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記)

「ペタペタペタペタ」は慣習的オノマトペ「ペタペタ」をさらに反復させた形態であるが、「ペタペタ」は足音を表すのに用いられる。その意味では、上の例における「ペタペタペ



タペタ」というオノマトペの使用は文の意味と矛盾するものではなく整合している。しかしながら、一緒に使われている動詞との関係について厳密に言うと、少し違和感がある。このオノマトペと一緒に使われる動詞は、通常、「足音を立てる」や「言わせる」であろう。したがって、上の例文は「ペタペタペタペタ {足音を立てながら・言わせながら} が正確な表現であり、述語が省略された文と考えるのが適切だろう。また、「ペタペタペタペタ」が用いられているのは、ばけものが一人ではなく沢山いることを表すためである。

次の文も(25)の例とよく似ていると言えよう。

- (28) すぐ改札のベルが鳴りみんなはわいわい切符を切って貰ってトランクや袋を車の中にかつぎ込みました。(氷河鼠の毛皮)

「わいわい」は大勢の人がにぎやかに大きな騒ぐ声を表すので、典型的に「わいわい騒ぐ」という形で用いられる。上の例では、「わいわい」が「切符を切って貰う」という表現と共に用いられているが、この場合も「わいわい騒ぎながら」という意味なので、「わいわい」と通常一緒に用いられる「騒ぐ」という動詞が省略されて用いられていると考えるべきだろう。

### 3. 結論

本稿の目的は、宮澤賢治のオノマトペが具体的にどういった点でユニークなのかを明らかにすることであるが、田守(2009)では、作品に見られるオノマトペの中には、私たちが日常的に使っているオノマトペとは異なる、賢治独特のオノマトペ(非慣習的オノマトペ)がたくさんあることを示し、その実体を明らかにした。本稿では、作品に現れるオノマトペ自体がユニークではなく、オノマトペの使い方がユニークであることに焦点を当てた。すなわち、私たちが日常的に使っている慣習的な使い方と異なる、賢治独特の使い方をしてるオノマトペを取り上げ、考察を試みた。その結果、賢治特有の使い方を次のように分類した：①通常使われない動詞と一緒にになったもの、②通常一緒に用いられている動詞と正反対の意味の動詞と一緒に使われるもの、③通常使われない名詞(主体)と一緒にになったもの、④通常使われない名詞(対象)と一緒にになったもの、⑤通常使われない名詞および動詞と一緒にになったもの、⑥比喩的に使ったもの、⑦動詞として使われるもの、⑧様態副詞のオノマトペを結果副詞的に使ったもの、⑨動詞が省略されたもの。以上のような、賢治独特の用法は、仮に私たちがそのように使ったとしたら、おそらく逸脱した不適格な使い方であると見なされるだろう。賢治が私たちの使い方とは異なる、独自の用法を用いた

のは、とりもなおさず、賢治の創造力・想像力の豊かさおよび私たち凡人には備わっていない、語感の鋭さに他ならない。これこそが賢治をオノマトベの達人と言わしめる所以であろう。

### 【注】

\* 本稿は主として『賢治オノマトベの謎を解く』（大修館書店）の第4章に基づく。

- (1) 原文は、/で改行、以下同様。
- (2) 様態副詞と結果副詞についての詳しい議論はTakahara (1975-76)、Tamori (1984)、田守・スコウラップ (1999)、田守 (2002)、田守 (2008) を参照されたい。
- (3) \*印は、日本語として不適格な表現であることを示す。

### 【参考文献】

- 井上ひさし (1984) 『私家版 日本語文法』新潮文庫.
- 川越めぐみ (2008) 「東北方言の宮澤賢治オノマトベ考察」『国文学』53.14:107-115.
- 三島由紀夫 (1959) 『文章読本』中公文庫.
- 小野正弘 (2007) 『日本語オノマトベ辞典』小学館.
- Takahara, Kumiko (1975-76) "Stative and Manner Adverbs in Japanese," *Papers in Japanese Linguistics* 4:167-179.
- Tamori, Ikuhiro (1984) "Japanese Onomatopoeias: Manner Adverbials vs. Resultative Adverbials," *Jumbun Ronshu* 20.2:51-66, Kobe University of Commerce.
- 田守育啓 (2002) 『オノマトベ 擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店.
- 田守育啓 (2004) 「宮澤賢治のオノマトベ」影山太郎・岸本秀樹 (編) 『日本語の分析と言語類型』柴谷方良教授還暦論文集 199-213. くろしお出版.
- 田守育啓 (2008) 「オノマトベの体系性」『国文学』53.14:70-79.
- 田守育啓 (2010) 『賢治オノマトベの謎を解く』大修館書店.
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトベ—形態と意味—』くろしお出版.